

Title	静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について
Sub Title	Archaeological sites of the last stage of Jyomon Culture in the eastern part of Shizuoka Prefecture
Author	笹津, 備洋(Sasazu, Masahiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.1 (1962. 6) ,p.47- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620600-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について

笹津備洋

一
従来静岡県東部には縄文文化晩期の遺跡は存在しないと思われがちであった。なかには晩期になると文化の中心は県西部に移ってしまったのではないかという意見を述べる人もあった。

しかし最近、静岡県東部においても数ヶ所において晩期の遺跡が発見され、今後次第にその数を増すであろうことは充分期待し得るのである。ここで筆者が資料を蒐集した五遺跡を簡単に紹介し、静岡県東部の縄文文化晩期の様相を展望したいと思う。

二

1. 館遺跡 たて この遺跡は昭和三五年八月静岡県立沼津東高等学校、同西高等学校の生徒が協力し、江坂輝弥氏の指導の下に発掘した遺跡である。遺跡は玄岳山塊くろだけの西麓が、狩野川沖積地に接するところに位置する独立丘である。(館たての

静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について

(四七)

四七



第1図 函南村館遺跡

地名が示すように後世丘陵の先端が切断されて独立丘になったという疑いもあるが、確証はない。東、西、南の各面は切り立つた急斜面であるが、北面のみは数段の段丘を形づくっている。

遺物はこの丘の最上段から第三段目まで散布し、最上段には縄文文化後期、晚期、弥生文化中・後期の土器と土師器などが出土し、二、三段目には弥生文化後期の土器が出土する。

遺構としては縄文文化晩期のもものと推定される、径五〇センチ・メートルほどの小石組遺構、同じく長径二メートル、短径一メートル、深さ八〇センチ・メートルのピットが発見され、また縄文文化後期、晩期の包含層を破壊して、弥生文化後期のものと思われる大きなV字溝が南北に貫いていた。このため包含層は攪乱され、遺物の層序を確認することは困難であった。

出土遺物については今回は縄文文化晩期の遺物についてのみ記述する。

イ、石器

石劔断片 一

石棒断片 一

石 鏃 八

ロ、土製品

環状耳飾 一

土器片 多数

土器片は次のように分類することができる。

第I類 (第四図、3・11・15)

帯縄文、三叉状文などを持つ安行Ⅲ a・b式の土器片

第II類 (第四図4・14・17)

羊歯状文、磨消縄文などの施された大洞BC・C₁式系の土器片、

第III類 (第四図1)

非常に粗い条痕文を施文された土器片

第IV類 (第四図7・8・16)

沈線文の施文された土器片

第V類 (第四図2)

無文土器片

以上の土器を見るとこの遺跡が晩期前半の遺跡であることは明らかであり、かつ関東地方の安行Ⅲ a・b式土器との類似が認められる。

2. 山王遺跡 この遺跡は庵原郡の山岳地帯の末端が富士川下流に接するところに位置する独立丘上にある。昭和三五年富士川町教育委員会の稲垣甲子男氏によつて発見され、遺物が蒐集された。

静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について

(四九)

四九

丘上の平坦面には縄文文化早期・中期・晩期などの土器片が散布しているが、早期と晩期は遺跡が重複し、中期はやや地域を異にするらしい。表面採集の遺物であるために遺物の層序などについては不明である。採集遺物は次のごとくである。

イ、石器

石棒断片 五

石 鏃 多数

ロ、土器片 多数

晩期の土器は次のように分類することができる。

第Ⅰ類 (第五図1、3、5、7)

浮線網状文の施された土器

第Ⅱ類 (第五図8、9)

口頸部に一乃至四条の沈線を帯状に施文した土器

第Ⅲ類 (第五図12、15、17、18)

条痕文の施文された土器

第Ⅳ類 (第五図16)

沈線文の施文された土器

第Ⅴ類 (第五図11)

繩文の施文された土器

第Ⅲ類の条痕文には粗い条痕と細い条痕、むしろ擦痕文といった方が適當かと思われるものとの二様がある。第Ⅴ類の斜繩文の施文された土器片は晩期の他の土器に伴存するものかどうか判然としないが、一応図示したものである。

3. 北久保遺跡 この遺跡は前記の山王遺跡のある丘の東南麓に位置する扇状地にある。本遺跡も稲垣甲子男氏によつて発見され、遺物が蒐集された。この遺物は繩文文化早期(第六図8) 弥生文化中期の遺跡と複合している。表面採集による遺物であるために、石鏃数個も採集されているが、いづれの時期のものか明らかでない。

晩期の土器は次のように分類できる。

第Ⅰ類 (第六図1)

浮線網状文の施文された土器

第Ⅱ類 (第六図2)

口頸部に沈線を数条带状にめぐらせた土器

第Ⅲ類 (第六図9、11)

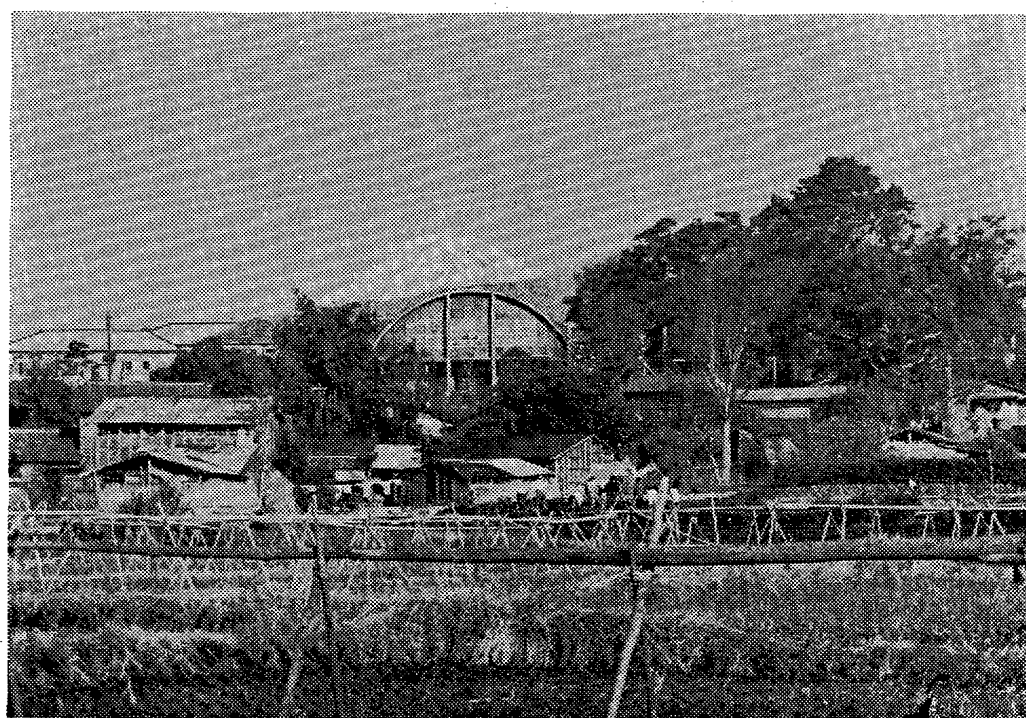
条痕文の施文された土器

第Ⅳ類 (第六図12)

沈線文の施文された土器

第Ⅴ類 (第六図4、6)

静岡県東部における繩文文化終末期の遺跡について



第2図 原町葱川遺跡

a、口唇部外縁に折り返へしたような突帯のある無文土器
b、口唇部に指で押したような刻目ある無文土器

4. 葱川遺跡⁽¹⁾ この遺跡はかつて沼津女子商業高校の小冊子に報告したものであるが、前記の山王、北久保両遺跡と関連のあるものを再録した。

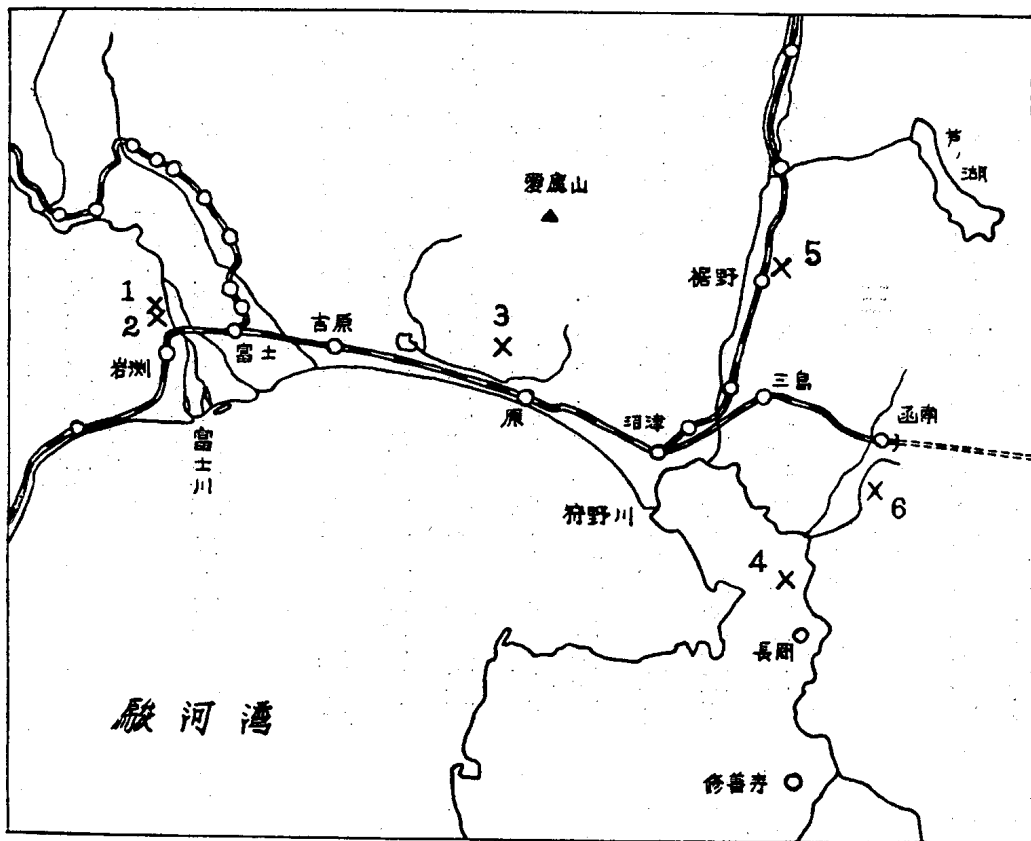
ここに図示したものは同報告で第Ⅲ類aとしたものと(第七図10、12) bとしたものである。(第七図1、9)

5. 珍野遺跡⁽²⁾ この遺跡についても最近沼津女子商業高校より簡単な略報を出したものであるが、本遺跡出土の縄文文化晩期の土器についてやゝ詳しく記してみたい。

第Ⅰ類(第八図1、5)

工字文、(1・5) 工字文の内部にさらに二本の隆起線の入ったもの、(4) 浮線網目状(2・3) などが施文されたもので、

器形からみると浅鉢土器(1、3)と壺形土器(4、5)と



第3図 静岡県東部における縄文文化終末期遺跡分布図

1. 山王遺跡 2. 北久保遺跡 3. 荻川遺跡 4. 珍野遺跡
5. 寺山遺跡 6. 館遺跡

がある。

第Ⅱ類 (第八図6~10)

口頸部に一、二条の沈線を带状に施文した土器で、器形は深鉢形である。

第Ⅲ類

無文土器で、器形は深鉢形である。

以上五遺跡の遺物について略記した次第であるが、この他に少量の遺物が採集されている遺跡を含めて、縄文文化晩期及びその直後と思われる遺跡の地名を挙げれば次のとおりである。

1. 田方郡函南村畑毛字館
2. 庵原郡富士川町岩淵字山王
3. " " 字北久保
4. 駿東郡原町平沼字荻川
5. 田方郡長岡町南江間字珍野
6. " " 花坂³⁾
7. 田方郡長岡町 長瀬字五斗無

8. " 函南村粕谷字向原⁽³⁾
9. 駿東郡裾野町公文名字寺山⁽⁴⁾
10. 御殿場市駒門字関屋塚⁽³⁾⁽⁵⁾
11. " 深沢字蓮花寺⁽³⁾⁽⁵⁾ (通称カマ田)

以上

6、の花坂遺跡から出土の独鈷石は静岡県史に紹介されている。(独鈷石が晩期またはその直後の遺物であるとすれば沼津市大平新城字出城山もこの表に加えることができる。) 7の長瀬字五斗無遺跡からは葱川、珍野の第Ⅱ類と類似する土器片が採集されている。8の向原遺跡は昭和二二年、三島市の日大で発掘調査を行い、昭和三六年には沼津東高等学校で再度の発掘調査を行っている。かつて亀ヶ岡式土器が採集されているというが詳細は不明である。ただ昭和三六年度の発掘遺物の中に、水神平式土器と思われる条痕文土器片が一片見られた。9の公文名字寺山遺跡は小野真一氏の略報があるが、昭和三四年に駿豆考古学会によつて発掘調査を行っている。10の関屋塚遺跡は鈴木恒治氏の略報があるが、筆者の実見したところでは、壺形土器は報文の図とやゝ異り頸部から肩部へ移る間に一段ふくらんだ段のある器形で、亀ヶ岡式土器によく見られるものである。11の蓮花寺遺跡は鈴木恒治氏の報文によつたものである。

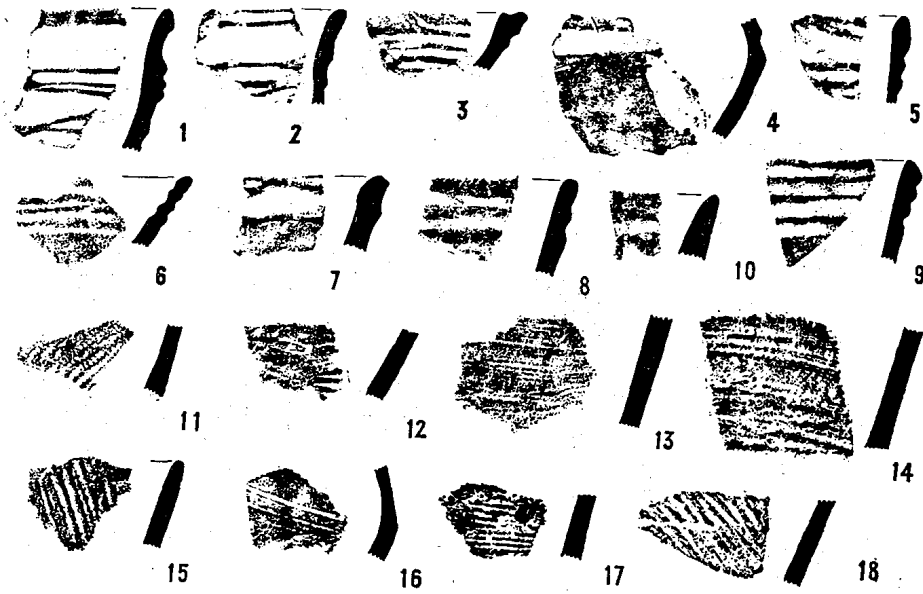
三

前記した遺跡の編年上の位置について考察してみたいと思う。

館遺跡出土の遺物を見ると安行Ⅲa・Ⅲb式と比定し得るものが見られ、(第四図3、15) またこれに伴つて大洞



第4図 函南村館遺跡出土土器片



第5図 富士川町山王遺跡出土土器片

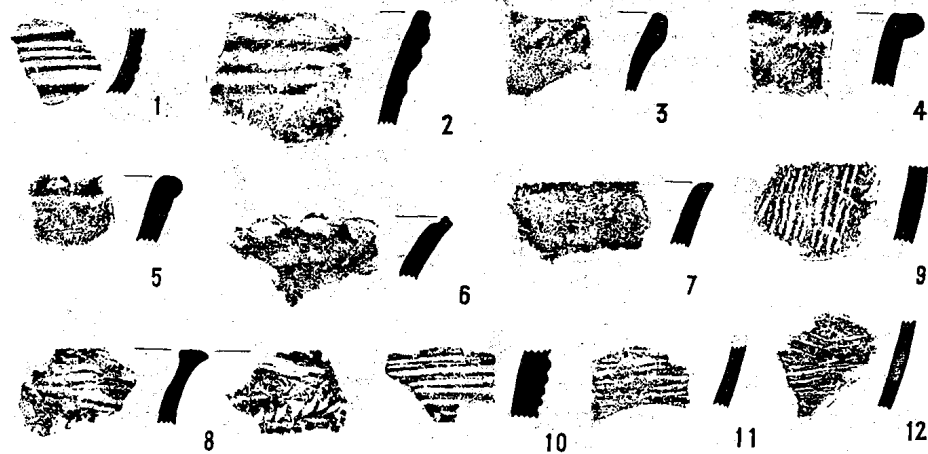
Bc・C₁式に比定し得るものが見られる。(第四図4・14・17)

また条痕文土器は山梨県河口湖畔の鵜ノ島遺跡(6)(15)のものと類似する。

第四図11は加曾利BⅡ式に対比されるべきものであろうか。これに伴うかと思われるものに第四図7、8のごとき羽状の沈線文を施文した土器がある。このような文様は加曾利BⅡ、Ⅲ式などの深鉢形土器の胴部に普遍的なものである。向坂鋼二氏は信濃、遠江地方のこの種文様の土器は加曾利BⅡ、Ⅲ式に後継する、後期末から晩期初頭にまで残存するものとしているが、^(?)当地方では未だいづれとも決しかねるものである。ただ第四図8の館遺跡出土の口頸部に近い土器片を見ると、加曾利BⅡ、Ⅲ式と異なるもののようにも思われる。

この種の土器は北久保(第六図12)、山王(第五図16)、葱川などにも見られるが、静岡県東部地方ではこの種の文様の施文された土器の下限が、清水市天王山遺跡以西の地方と同様な時期まで下降し存続したものであろうかは、未だ確認するまでに至っていない。

この他向坂氏が中ノ沢Ⅱ類Aとされたものと対比し得るものとして館遺跡出土の第四図9、10に拓影を示した土器片がある。また中ノ沢E・Fと対比し得るものが葱川出土の土器片中に認められる。これらが中部日本太平洋岸の縄文文化晩期のローカル・



第6図 富士川町北久保遺跡出土土器片

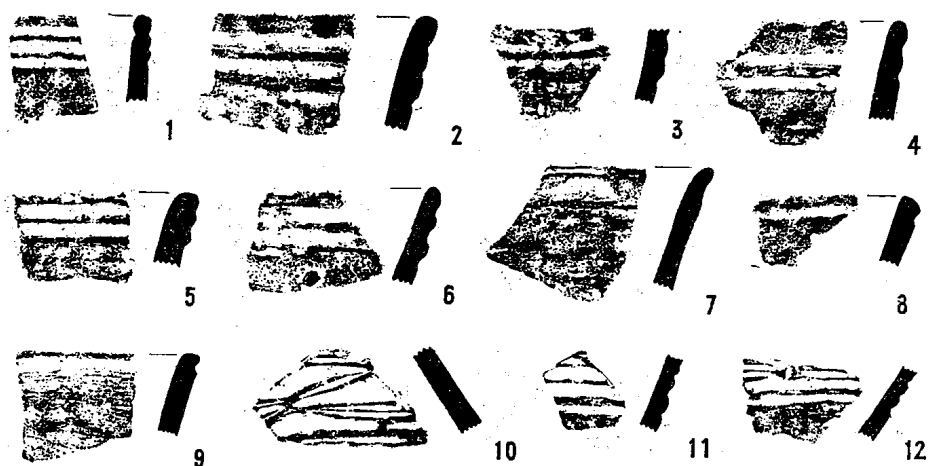
カラーであることは肯定できる。

また館遺跡からは拳大の小礫を使用して小規模な組石遺構が発掘されたが、これに近似の遺構は静岡県蜷塚貝塚⁽⁸⁾、山梨県日野春上条遺跡⁽⁶⁾⁽¹⁶⁾などからも発掘されている。

館遺跡出土の土器形式は明らかに晩期の前半を占めるもので、南関東地方に分布圏をもつ安行Ⅲa・b式的なローカル・カラーをもつものが、かなりに見られるが、また中部日本的なものも少量混つている。この時期の地理的な分布をたどるならば清水市天王山遺跡⁽⁹⁾中層発見の土器、山梨県上条遺跡、愛知県吉胡貝塚晩期旧B⁽¹⁰⁾、長野県中ノ沢遺跡⁽⁷⁾などを挙げることができる。

山王、北久保、葱川、珍野遺跡出土の土器は工字文、浮線網状文などによつて大洞A式との類似が求め得るが、珍野遺跡のそれと、他の遺跡のものとは時期的な先後関係のある疑いもあるが、現在の段階では明確でない。

これらに伴つて珍野Ⅱ類、葱川Ⅲ類b、山王Ⅱ類、北久保Ⅱ類のような口頸部に数条の沈線文帯をめぐらせた土器が伴うことは確実である。この時期の土器の地理的分布を見ると天王山遺跡最上層a、吉胡遺跡晩期新といわれているものや、縄文文化直後の土器と考えられている山梨県上条遺跡、長野県小諸市柳沢遺跡⁽¹¹⁾、同県岡谷市庄ノ畑遺跡などが挙げられる。またこの形式



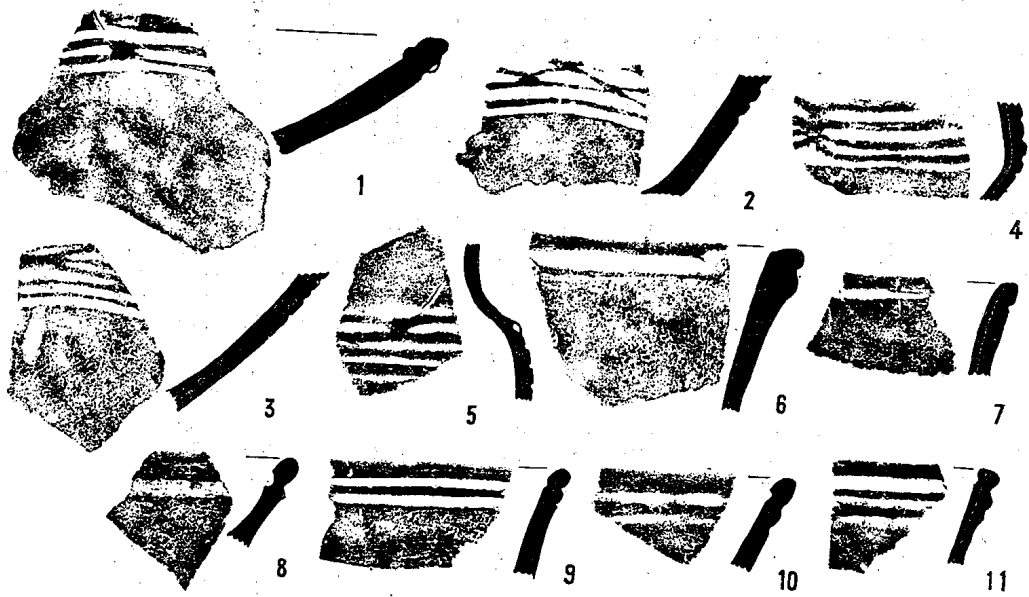
第7図 原町葱川遺跡出土土器片

の土器は南関東地方の横浜市磯子区杉田貝塚から発見され杉田式土器と呼ばれている。

しかしこれら四遺跡発見の土器は細部においては若干の差異があり、これを地域的な差異とするか、年代的な差異とするかは今後に残された課題である。

吉胡貝塚をはじめ、長野県下ではこの浮線網状文土器に、口唇部直下に突帯をめぐらした条痕文土器が伴うのに対して、静岡県東部においては、この種の土器を確実に伴出したという遺跡は知られていない。むしろ突帯文のない条痕文土器が、清水市天王山遺跡において浮線網状文土器片に伴って出土し、同遺跡の報告書では縄文直後の土器として「最上層a類土器」としてあつかわれ、東海地方西部の水神平式や奥羽地方の大洞A式に対比されるものではないかと記している。

また裾野町寺山遺跡では浮線網状文土器に後続すると思われる、沈線による網状文に、前記の突帯文のない条痕文土器が伴うようである。この種の条痕文土器は小野真一氏の指摘するように、静岡市丸子^{まりこ}セイゾウ山遺跡発見の土器に見られるようなこの地方の弥生文化初頭の土器と共通するものである。しかしながらセイゾウ山遺跡¹²の条痕文土器には、表面にのみ条痕がある



第8図 長岡町珍野遺跡出土土器片

ものと、表裏両面に条痕があるものがあり、両者の間に時間的な差異を認めようとするものもある。この点については珍野遺跡において、条痕文土器が全然伴出しなかつたことが確実であるだけで、寺山遺跡の発掘結果については未だ報告がなく、かつ賀茂郡松崎町鴨が池遺跡⁽¹³⁾に見られる磨消縄文手法の土器との関連が不明であるので、積極的な解決を与えることは困難である。ただ寺山遺跡発見の沈線による網状文ある土器は、西村正衛氏のいわれる荒海第二類d種土器⁽¹⁴⁾と非常に類似点が多い。ただ粗製土器（e種）については異つた特徴が見られる。これは地域的な差異によるものであろうか。

以上静岡県東部の縄文文化晩期の土器について簡単な紹介を行ったのであるが、晩期前半と晩期末の間にやゝ空白が感ぜられ、はつきりとした推移を把握することができない。しかし今後さらに新遺跡の発見が増加すればこの点も解明されるであろう。またこの地方の縄文文化から弥生文化への変遷過程も次第に明らかになり、完全に明らかにされる日も近いように思われる。

四

次に遺跡立地の問題について少し記してみたい。静岡県東部は非常に縄文文化の遺跡の数が多くにもかゝらず、従来縄文文化晩期の遺跡がほとんど発見されなかつた。これは遺跡立地の問題と大きな関係がある。まず試みに県東部の遺跡分布をさらに数地域に細分すると次のようになる。

A、伊豆半島東海岸

早(12) 前(22) 中(42) 後(12)

B、伊豆半島西海岸

早(2) 前(1) 中(17) 後(6)

C、伊豆半島内陸部(狩野川・黄瀬川流域)

早(75) 前(44) 中(98) 後(23) 晩(1)

D、愛鷹山南麓

早(31) 前(8) 中(23) 後(11) 晩(2)

E、富士川東岸

早(12) 前(5) 中(28) 後(12) 晩(2)

F、富士川西岸

早(1) 前(2) 中(3) 後(4) 晩(2)

この表で見ると伊豆東海岸を除いて早期から前期に移ると遺跡数が減少する。また富士川西岸を除いて中期から後期に移ると遺跡数が激減するのである。無論この場合遺跡の規模の大小を度外視しているので、人口増減、移動などを論じる根拠にはならない。しかしこの傾向は後期から晩期に移る時期には極端にあらわれ、遺跡数の激減をみるのである。このために文化中心の移動という考えも生じて来るわけであるが、これを遺跡立地の点からある程度説明できるよ
うに考える。

早期の遺跡は半島状台地の先端、標高の高い鞍部などに集中している。前期の遺跡はこの位置よりもやゝ下る傾向を示す。中期になると比較的大きな谷に沿った、台上に広い平坦面のある台地上に大規模な集落を営む傾向が強い。また台地の裾に当る沖積地に接する低台地にも遺跡が発見されるようになる。吉原市境字の場にある中期初頭の遺物を出土する遺跡や、田方郡大仁町田京字堂城における勝坂式土器出土遺跡などはこの例である。また狩野川河谷の段丘上にも遺跡が存在する。後期の遺跡は中期末の加曾利EⅢ式から堀ノ内式まで継続して営まれた沼津市岡一色字丸尾遺跡のごとく加曾利EⅢ式、称名寺式などの土器を出土する遺跡と、堀ノ内式から加曾利B式まで続いた遺跡とがある。前者に比較して後者はより低く平坦な台地を選ぶ傾向がある。

後期から晩期に継続する遺跡は非常に少く僅かに館遺跡を挙げ得るのみである。それならば後期から晩期の間になき人口の移動を認めなければならぬのであろうか。私はむしろそれを遺跡の立地景観の変化によつて説明したいと考
える。

縄文文化晩期の遺跡の立地については、二つの際立った特徴がある。

1. 独立丘上遺跡

静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について

2. 低湿地縁辺遺跡

1の独立丘上遺跡としては館道跡、山王遺跡、寺山遺跡などがあるが、これは弥生文化初頭の寺山遺跡、沼津市大平丸山遺跡、静岡市丸子セイゾウ山遺跡⁽¹²⁾に立地景観が近似する。

2の低湿地縁辺遺跡としては葱川遺跡、珍野遺跡、北久保遺跡を挙げることができるが、このような立地景観をもつ遺跡も弥生文化初頭の遺跡に見られるところであり、駿河矢崎遺跡⁽¹¹⁾、松崎町鴨が池遺跡⁽¹³⁾などがこの例である。

即ちこの晩期遺跡の二つの立地景観はそのまゝ弥生文化初頭の遺跡の立地景観となり、全く軌を一にしている。この地方の縄文文化の終末期から弥生文化の初頭にかけて、このような二つの対象的な集落立地景観の存在することは、何等かの生活条件に規制されるところがあつたとみななければならないように思うのであるが、いかがなものであろうか。この二つの異つた立地景観が、同一の生活条件下に派生したものであるか、また全く異つた生活条件下に発生したものであるかは今後の研究にまつ外はない。しかし後者の低湿地の縁辺に集落を形成する遺跡が従来ほとんど縄文文化研究者の注意にのぼることがなかつたのは事実である。

それはこのような地区が多くの場合、現在の集落と重複し踏査が困難なところが多かつたためである。しかし最近の経済的条件と変化によつて、これらの集落の移動が促され、このような地形上の遺跡も徐々に発見される気運が到来したのである。

五

以上静岡県東部における現在までに筆者の知見に上つた資料について略述したのであるが、何分少い資料であるため

に、杜撰な点が少くない。今後資料の増加をまつて再考したいと考えている。さらに先学諸氏の御叱正を賜われれば幸甚である。

終りに当つて種々御教示を下さつた江坂輝弥氏、小野真一氏に対し、また遺跡分布図、土器片拓影の挿図など作成に協力してくれた渡辺誠君に対し、深甚な謝意を表する次第である。

註

- (1) 笹津備洋 駿東郡原町葱川遺跡調査報告
沼津女子商業高校郷土研究部刊
昭和36年4月
 - (2) 小野真一 伊豆国珍野遺跡略報
沼津女子商業高校郷土研究部刊
昭和37年3月
 - (3) 静岡県教育委員会編 静岡県文化財調査報告書第1表
静岡県遺跡地名表
昭和36年3月
 - (4) 小野真一 裾野町寺山遺跡出土土器の一考察
駿豆考古第5号
昭和36年8月
 - (5) 鈴木恒治 御殿場の古代文化第一編
御殿場市文化財調査委員会
昭和34年3月
 - (6) 山本寿々雄 山梨県に於ける縄文土器の展開
県立富士国立公園博物館研究報告第2号
昭和34年3月
 - (7) 向坂鋼二 長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾
第四紀研究第2巻第1号
昭和36年4月
 - (8) 浜松市教育委員会編 蜷塚遺跡
その第三次発掘調査
昭和35年9月
 - (9) 清水市郷土研究会編 清水天王山遺跡
昭和35年8月
- 静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について

(10) 文化財保護委員会編

埋蔵文化財発掘調査報告、第一
吉 胡 貝 塚

昭和27年3月

(11) 永 峯 光 一

千曲川沿岸地方における晩期縄文式
土器に就いて

石器時代1号
昭和30年4月

(12) 安 本 博

静岡市丸子区細工所セイゾウ山遺蹟
と遺物に就いて
——特に丸子式土器の出土に関して——

静岡県郷土研究第12輯
昭和14年5月

(13) 佐 藤 民 雄

伊豆仁科鴨ヶ池弥生式遺蹟

考古学第9巻第3号
昭和13年3月

(14) 西 村 正 衛

千葉県成田市荒海貝塚

——東部関東地方縄文文化終末期の
研究——

古代第36号
昭和36年3月

(15) 野 崎 逸 男

鵜の島の土器

(考古学的に見た富士五湖特輯号)

静岡県田子浦高等学校郷土研究部刊
郷土研究3号
昭和26年

(16)

大山 竹下 井出
柏 重 佐次

山梨県日野春村長坂上条発掘報告

史前学雑誌第13巻3号
昭和16年6月

(17)

吉 田 格

日本考古学講座縄文文化

——関東——

河出書房
昭和21年2月

(18)

江 藤 千 萬 樹

駿河矢崎弥生式遺蹟調査報告

考古学8巻6号
昭和12年6月

江 藤 千 萬 樹

矢崎遺蹟予察

上代文化第16輯
昭和13年11月